

「しがらみ」と「つながり」と

独立行政法人国立病院機構福山医療センター 村上 敬子

私と医師会のおつきあいは2010年からです。それまで医師会に所属したことはなく、その存在を意識したこともありませんでした。語感に漠然と漂う政治や権力の香りに、むしろ縁のない世界だと思っていました。そんなある日、まさかの福山市医師会理事となりました。おそらく公的病院から誰かを選出しなければいけない事情があり、そこに勤務していた女性医師が珍しかったからであろうと思います。選ばれた理由はあいまい、医師会に対する知識はほぼ皆無、なんともmotivationはあがりませんでした。おそるおそる理事会に出席すると、「地対協」（ミサイル!?）、「事故調」などの暗号めいたコードネームや、「ヨビダイギイン」「ヒエイリホウジン」など、脳内で漢字変換できても謎だらけのコトバが飛び交い、思考停止状態です。「〇〇推進協議会」や「〇〇対策会議」を計画し、「〇〇要望書」を作成し、いったいどこまで医師が担うべき活動なのかと日々仰天したものです。

医師の理念は“臨床と研究と教育”の3本柱であると教えられてきました。日本の医学教育でこれは正論です。ところが実際の現場では、ごくまっとうな医療も正しい政策なしには行えないのです。目からウロコの事実でした。開業されている先生方は日夜実感されていることでしょうが、勤務医なんて、特に最近は専門細分化のながれにあって、自分の専門領域のごく狭い医療が完遂できれば賞賛される世界に生きています。医療は社会を構成するひとつのパーツであって、法律や予算に翻弄されれば、当たり前前のことが当たり前に行えなくなる、こういう現実的な感覚には疎いのです。医師会活動にまじめに関わって、こんなことがわかるのに3年もか

かりました。社会人となる前に知るべきでした。今、遅ればせながら世の中のしくみを学んでいます。

昨年11月に尾道市で医師会勤務医部会が発足し、第1回目の総会が開催されました。出席者は広島県や尾道市の医師会関係者、市内の病院幹部の先生方などで、現場の勤務医の姿は残念ながらかわずかでした。若手～中堅勤務医の医師会に対する関心はこの程度なのだろうなど、3年前の私を思い返して妙に納得するとともに、主催者に申し訳ない気持ちでした。この微妙な温度差を埋めるべく何かできることはあるのか考えました。まずは、医師会を身近に感じてもらうための情報発信からと、偏見や先入観のなさそうな初期研修医を対象に備後地区の「研修医の集い」を主催することにしました。お互いの親睦を深めてもらうことが目的ですが、同時に医療を取り巻く環境に興味を持ち、医師会が果たす役割をイメージしてもらえればと思っています。かくいう私の持っていた医師会（特に理事会）に対するイメージは伏魔殿でした…。あまり説得力がないかもしれません。

昨今、大学医局に入局しない若手医師が増加しています。同門とか同窓といったタテやヨコのつながりをもたない、良くも悪くもしがらみのない医師たちです。彼らが気軽に利用でき、信頼できる、開かれた組織として地元医師会が活動できればと思います。医師会は世代を超え、専門科を越えた交流ができる場です。こう書くと「つるむのは嫌だ」などと言われそうですが、フレッシュな彼らに煙たがられない程度につながる事ができればよいと思います。